教養としての建築入門　坂牛 卓

2023.9.29　担当 : 山口

序章　建築の歴史

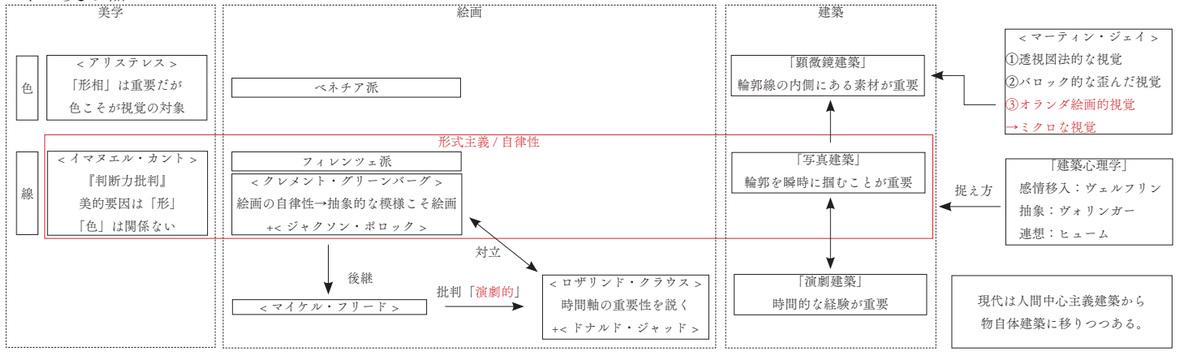
20 世紀以降モダニズム建築が生まれ、その特徴は建築の屋根が〇・△から□へ変わったことと装飾が無くなったことである。また装飾がある建築には「意味 (意図)」があったが、無装飾なモダニズム建築はエミール・カウフマンによって「自律的」と称された。そしてモダニズム建築に対抗する立場としてポストモダニズム建築が生まれ、先頭をとったチャールズ・ジェンクスは、のっぺりとした箱建築であるモダニズム建築が持っている意味の少なさを批判した。これを著者は自律的建築の対を成す建築として、外から意味を引き込む建築を「他律的建築」と呼んでいる。

第一部　鑑賞論 － 建築の見方

第 1 章　機能の器

ウィトルウィウスが提唱した建築の三原理「用・強・美」は建築を見る上での補助線となり、中でも「機能」に関係があるのは用・強である。ルイス・サリヴァンは「形態は機能に従う」という言葉を残しているが、ここでの機能とは「宿命」や「摂理」と言い換えられ、実際のサリヴァンの作品には植物的な装飾が多かった。一方でニコラス・ペヴスナーは機能を果たす建物をデザインするべきという「機能主義」を提唱した。現代の日本建築に求められる機能とは SDGs やウイルス、地震に対して建築をどう作るかという側面が大きい。

第 2 章　美の器

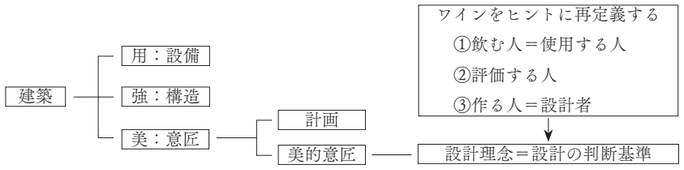


第 3 章　アナロジー

【人間と建築】	【服と建築】	【料理と建築】	【音楽・アートと建築】
自律的建築は要素の個別化が図られバランスを保つ意思がないため「妖怪建築」となった。対してパルテノン神殿の柱には男女性があったり、日本では縄文を男性的、弥生を女性的とらえ、人間的に見ていた。	ゴットフリート・ゼンパーは「被覆」の概念を唱え、後継したアドルフ・ロースは被覆する素材や色に強くこだわった。また坂本一成はキネステーゼ (身体性) を重視して設計を行った。	料理と建築には材料を加工し②レシピ (設計図) をもってして③日常的なものをつくることに共通性がある。	ミニマルアート、ミニマルミュージックの出現の後、「ポップ」が出現し「わかりやすさ」を提示した。一方で建築のポップは他との差異化として前面に現れた。

第二部　設計論 － 建築の作り方

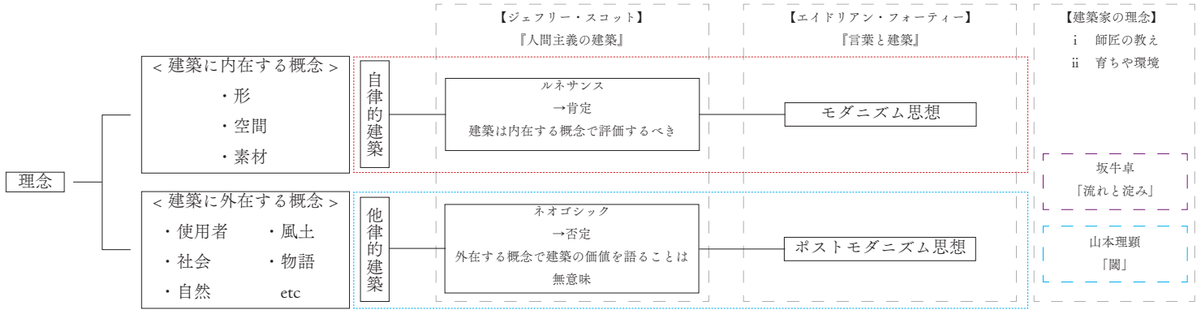
第 4 章　建築の設計とは何か



美的意匠の判断基準には様々な要因がある。20 世紀末のモダニズムの瓦解から現代に至るまで、建築家はそれぞれの設計理念を模索する時代となっている。
そこでワインをヒントに建築の理念を捉え直してみることができ、建築においてもポジションを決めるという理念が重要。

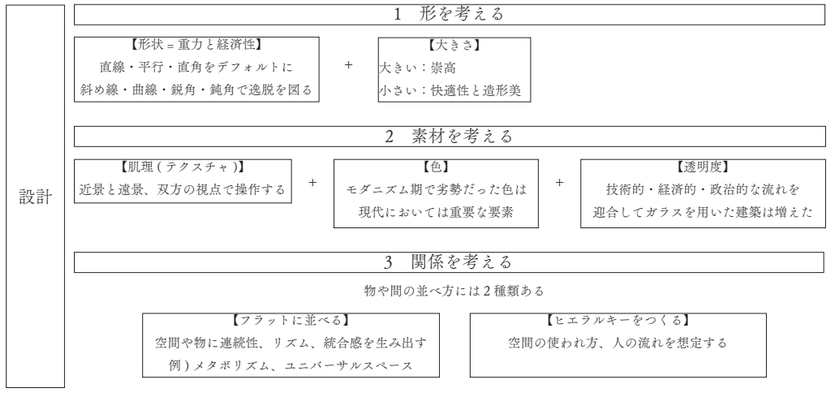
第 5 章　頭の中で考える

建築家の設計とは継続的な創作活動であり、設計→完成→反省のサイクルの中で蓄積された方針が理念となる。



第 6 章　スケッチや模型で考える

設計のおいて、頭の中で考えた次のステップとしてスケッチや模型をつくる。そこで考える要素は大きく分けて 3 つある。

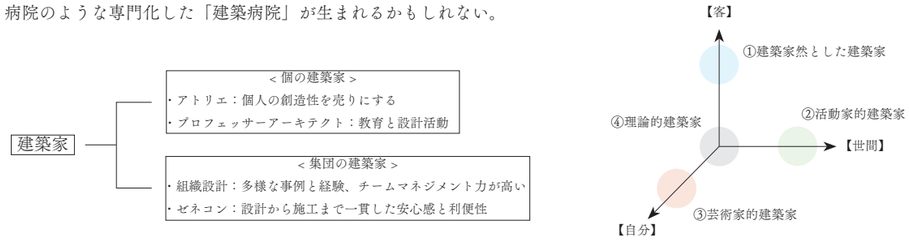


第 7 章　実物を見て考える

設計から施工の段階で頭の中で描いていた建築とのズレが生じるが、目の前の建物を受け止め設計の構想を微修正するしかない。設計者は良い建築ができれば喜び、想定外に悪い仕上がりになれば無念を噛みしめる。そしてクライアントや他の建築家からの感想も教訓になる。特に真っ当な批判は心に刺さり、建築家の糧となる。

第 8 章　建築家という職業

建築家という職能は西欧で生まれ、明示維新と共に日本に輸入された。必要な素質は「継続する力」であり技やセンスを蓄積し、より良い建築を作り続けないといけない。そして建築家はクライアントと社会双方のニーズを汲み取り調停する役割もある。しかし近年ではニーズも多様化し、求められる職能も増えてきたため、病院のような専門化した「建築病院」が生まれるかもしれない。



第三部　社会論 － 建築の活かし方

第 9 章　世相が建築に映る

建築に映り込む世相としては、広告塔としてスカイスクレーパーや住宅内に女性の居場所ができたことが挙げられる。また現代の建築が持っている社会に寄与するための目標は SDGs である。またスラム改善や子供のための施設など、建築と社会の繋がりは大きい。

第 10 章　人や社会が建築を変える

・人から受ける影響

デカルトが提唱した主体概念はモダニズム建築の源流を産んだ。しかしチャールズ・ムーアによって主体性 (ホワイト派) は他者性 (グレー派) に批判される。今日においては石上純也の作品をはじめとした他者性が埋め込まれた新しい主体性の建築が増えると考えれる。

・社会から受ける影響

資本主義は消費を促すように「記号性 (わかりやすさ)」を重視した。建築においては伊東豊雄や坂本一成が容認していく一方で、逆のベクトルでコンセプトを練り上げた建築家にレム・コールハースが挙げれる。また建築のグローバリゼーションとして「インターナショナル・スタイル」という箱型建築も多く作られるようになるが、20 世紀後半には地方の多様性を守ろうとする「批判的地域主義」や特殊な土着的デザインを行う「ダーティーリアリズム」が生まれた。

第 11 章　政治と経済が利用する

建築は政治の道具として「ファシズム建築」を代表に権力の象徴して利用されたり、設計者自身のネームバリュー (スターアーキテクト) をもって経済的な効果を生み出す商品として利用されることもある。

終章　建築の基礎

建築の商品化の動きは外部 (経済) から方向づけられるものであり、この他律性 = 商品化を回避する方法は建築の自律性を高めることである。

①建築の投機性を成り立たせている資本主義の仕組みに介入すること

②経済の下部構造に対して自律的な建築を構想してみる